

日曜聖書講筵 (婦選会館 公開集会)

最後の晚餐

——マルコ伝 14 章 12 ~ 26 節 ——

小池辰雄

1965年6月13日

過越の食 最後の晚餐 キリストに与かる キリストの靈的生命 懐の中に 内側から共感
靈界との融合 十字架と聖靈 洗礼と聖餐は二にして一つ 神品 キリストの本願 無は即ち
無限無数

【マルコ 14・12 ~ 26】

¹²除酵祭の初めの日、弟子たちイエスに言う『過越の食をなし給うために、我らが何処に往きて備うることを望み給うか』¹³イエス二人の弟子を遣さんとして言いたもう『都に往け、然らば水をいれたる瓶を持つ人、なんじらに遇うべし。之に従い往き、¹⁴その入る所の家主に「師いう、われ弟子らと共に過越の食を為すべき座敷は何処なるか」と言え。¹⁵然らば調えたる大なる二階座敷を見すべし。其処に我らのために備えよ』¹⁶弟子たち出で往きて都へ入り、イエスの言い給いし如くなるを見て、過越の設備をなせり。

¹⁷日暮れてイエス十二弟子とともに往き、¹⁸みな席に就きて食するとき言い給う『まことに汝らに告ぐ、我と共に食する汝らの中の一人、われを賣らん』¹⁹弟子たち憂いて一人一人『われなるか』と言い出でしに、²⁰イエス言いたもう『十二のうちの一人にて我と共にパンを鉢に浸す者は夫なり。²¹實に人の子は己に就きて録されたる如く逝くなり。然れど人の子を売る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを』

²²彼ら食しおる時、イエス、パンを取り、祝してさき、弟子たちに与えて言いたもう『取れ、これは我が体なり』²³また酒杯を取り、謝して彼らに与え給えば、皆この酒杯より飲めり。²⁴また言い給う『これは契約の我が血、おおくの人の為に流す所のものなり。²⁵誠に汝らに告ぐ、神の国にて新しきものを飲む日までは、われ葡萄の果より成るものと飲まじ』²⁶かれら讃美をうたいて後、オリーブ山に出でゆく。

●過越の食

これは受難週間の第5日目、ニサンの月の14日木曜のことです。



即ち、過越の羔羊を屠るべき日。ユダヤでいうと、過越の祝いです。これは午後に屠ることになっています。

弟子たちイエスに言う『過越の食をなし給うために、我らが何処に往きて備うることを望み給うか』¹³イエス一人の弟子を

というのは、ペテロとヨハネです。

遣さんとして言いたもう『都に往け、然らば水をいれたる瓶を持つ人、なんじらに遇うべし。之に従い往き、¹⁴その入る所の家主に「師いう、われ弟子らと共に過越の食を為すべき座敷は何処なるか」と言え。¹⁵然らば調えたる大なる二階座敷を見すべし。其處に我らのために備えよ』¹⁶弟子たち出で往きて都へ入り、イエスの言い給いし如くなるを見て、過越の設備をなせり。

エルサレム入城のときも、

「まだ使つたことのない子驥馬がつないのであるから、それを持つてきなさい。自分はそれに乗つて行くから」

というようなことを、ちゃんと靈視しておられる。この場合も、ちゃんと予見しておられるわけです。日が暮れまして——夕方から向こうは数えますから——第6日目になります。15日の金曜になるわけです。最後の晚餐です。

¹⁷日暮れてイエス十二弟子とともに往き、¹⁸みな席に就きて食するとき言い給う『まことに汝らに告ぐ、我と共に食する汝らの中の一人、われを売らん』¹⁹弟子たち憂いて一人一人『われなるか』と言い出でしに、²⁰イエス言いたもう『十二のうちの一人にて我と共にパンを鉢に浸す者は夫なり。²¹實に人の子は己に就きて録^{しる}されたる如く逝くなり。然れど人の子を売る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを』

²²彼ら食しおる時、イエス、パンを取り、祝してさき、弟子たちに与えて言いたもう『取れ、これは我が体なり』²³また酒^{さかずき}を取り、謝して彼らに与え給えば、皆この酒杯より飲めり。²⁴また言い給う『これは契約の我が血、おおくの人の為に流す所のものなり。²⁵誠に汝らに告ぐ、神の国にて新しきものを飲む日までは、われ葡萄の果より成るものを飲まじ』²⁶かれら讃美をうたいて後、オリーブ山に出でゆく。

●最後の晚餐

最後の晚餐というものが非常に重要な意味をもつてゐる。これは後に聖餐式となりまして、今、キリスト教会で、カトリックでもプロテスチントでも、聖餐式というものが行われてゐる。いわゆる「サクラメント」のうちの一つです。カトリックの方には七つのサク



ラメントがある。プロテスタントとは二つです。これは「サクラメントウム」というラテン語ですが、軍隊に入ると、その軍律に絶対服従するという誓いをする契約、それがそもそもローマにおいてのサクラメントという言葉の意味です。それが宗教的な、こういった事態に後に用いられるようになつたわけです。

もちろん、聖書の中にはサクラメントという言葉はない。カトリックでは、「洗礼」と「聖餐」。そして、「献身」。献身礼というのはプロテスタントにもある。懺悔の意味の「告悔」。「終油」と言いまして、終わりに死ぬ時に油を注がれる。「叙階」、こんなものが入つてるのはおかしなものですが、階級的なものです。それから、「結婚」。この七つがいわゆるサクラメントです。ルターやカル빈は、聖書にのつとつて、

「いや、その五つは余計だ」

と言つて、洗礼と聖餐だけに限るわけです。そういうふた聖餐の根拠となるものは聖書的に言うとパウロが始めた。コリント前書11章23節から、

「²³わが汝らに伝えしことは主より授けられたるなり。即ち主イエス付わたされ給う夜、パンを取り、²⁴祝して之を撃き、而して言い給う『これは汝等のための我が体からだなり。我が記念として之を行え』²⁵夕餐ゆうけのうち酒杯さかずきをも前の如くして言いたもう『この酒杯は我が血による新しき契約なり。飲むごとに我が記念として之をおこなえ』」(コリント前11・23～25)

「我が記念として之をおこなえ」

というような、こういう言い方は、イエスはおそらくなさらなかつたろうと、歴史的には思われる。パウロの息のかかっているルカ伝には、キリストの言葉として、そういうように書いてあるけれども。それは、パウロ先生に教わつたものだからというわけです。マルコ伝およびマタイ伝には、

「記念として之をおこなえ」

とは出でていない。

「これは契約の我が血、おおくの人の為に流す所のものなり」と。それだけのはなしです。マタイとマルコでは、そういうように書いてある。イエスは、もう神の国は近づいているので、

「記念として行う」

なんていう反復するような習慣的なものを考えられなかつた。

パウロにしても本来、そういつた非常に終末的な現実においてであるので、そういうことはパウロも考えなくてよかつたわけですが、パウロという人は、また一面いろいろな思想的な戦いに現にぶつかつてゐるし、非常に神学的な構造をもつた人ですから、がつちりとそこへ釘を刺したようなわけだうと思います。事実、古代教会においてはそういつたことが事実上は繰り返されていたということはあつた。その事実に基づいて更にそれをはつ



きりと御言として、その事実の根拠のもとに、パウロが付け加えたのだろうと思われます。

●キリストに与かる

このコリント前書11章が聖餐式の根拠となつてゐる。その前の10章14節から見ますと、「¹⁴さらば我が愛する者よ、偶像を拝することを避けよ。¹⁵われ慧き者に言う

ごとく言わん、我が言うところを判断せよ。¹⁶我らが祝うところの酒杯は、このキリストの血に与かるにあらずや、我らが擘く所のパンは、これキリストの体に与かるにあらずや。¹⁷パンは一つなれば、多くの我らも一体なり、皆ともに一つのパンに与かるに因る。¹⁸肉によるイスラエルを視よ、供物を食らう者は祭壇に与かるにあらずや。¹⁹然らば我が言うところは何ぞ、偶像の供物はあるものと言うか、また偶像はあるものと言うか。²⁰否われは言う、異邦人の供うる物は神に供うるにあらず、悪鬼に供うるなりと。我なんじらが悪鬼と交わるを欲せず。²¹なんじら主のと悪鬼の酒杯とを兼飲むこと能わず。主の食卓と悪鬼の食卓とに兼与かること能わず。²²われら主の始を惹起さんとするか、我らは主よりも強き者ならんや。」(コリント前書10・14～22)

パウロは、偶像崇拜に対するところの、非常にミステイッシュな、神秘的な面をここで非常に明らかに語つてゐる。

「キリストに与かる」

という。「サクラメント・ミステイッシュ」というのが、このコリント前書10章においてのパウロの言葉で分かるわけです。しかし、この10章のパウロの言つてゐる内容は極めて大事なことです。

この「与かる」ということが問題になりまして、後にルターとツビングリーが論争する。ルターとツビングリーに限らず、まだ今なおこのサクラメントについては、いろいろその教会の諸派によつて考え方が違う。

ルターとツビングリーが論争したのは1529年で、マールブルクの城の中です。私は事実、その城のその部屋まで行つて見ました。即ち、ルターは、マルコ伝の、「これは我が体である。我が血である」

という句には、ラテン語でいうと「エスト」(在る)という字があるというわけです。しかし、キリストの言葉はアラミ語で、アラミ語にはこの「在る」という言葉はない。

「これ我が血、これ我が肉」

というだけです。ヘブライ語がそうです。

「在る」とあるんだから、事実そなんだ。『在る』というので、そこに共に在るのだ

と言つて、ルターは非常に客観的に、葡萄酒とパンというところに、キリストがそこに在



ると。その「在る」というのは、ルターは相当強引な解釈の仕方です。

カトリックの方では、「あずかる」というパウロの言葉をもう少し更に神秘化して、いわゆる「化体説」と言いまして、

「パンが事実、キリストの体になつてしまふ。葡萄酒がキリストの血になつてしまふ。『血にあずかる』というのは、血と同質なものに変わつてしまふということだ」というのが、カトリックの説でして、これはトマス・アクイナスあたりがはつきりそれを神学的に言つた。トリエント会議というのが1545年から63年まであって、その会議で決定されたのがいわゆる

「トランスズブスタンティアチオ」(実体変化説)

という。「ズブスタンツ」(実体)が変わつてしまふ、即ち、そういうふた葡萄酒とかパンというようなズブスタンツがキリストの体に化するという、キリストの体に化せられるという——少し悪口言えども、魔術的な——そういうふたことに、正直今でもなつてゐるようです。

ルターは、そうではないというわけです。

「コンズブスタンティアチオ」(共在説)

という。

「共にある。キリストがそこに共在しているんだ」

ということ。それをいただくときには、キリストがそこに共在して、それで、「あずかる」という意味だと。相当、人格的な意味ですね。大体、ルターの神学は非常に人格的な角度が強い。ドイツの信仰の或る一つの健全性は、人格性というものを非常に強調するところにある。今のドイツの神学者たちもそういう傾向が大体、一般的において強い。それは結構なことです。カント哲学を見ましても、非常にそういった哲学においてもそうです。そういうふた「共在説」なんです。

ところが、ツビングリーはそうじやないと言う。

「キリストはそういうふた酒杯を飲み、パンを裂きながら、ひとつシンボルとして、象徴として言われた。パンはパンであり、葡萄酒は葡萄酒なんだ。けれども、事実、それは象徴であつて、精神的にこれをとらなくてはいかん。シンボルである」と。「象徴説」をもつて譲らなかつた。そこで、二人がもの別れになつたというわけです。

カルビンは、このルターとツビングリーの論争をもちろん聴いたわけで、どうも、ルターもツビングリーもどちらも、まだ聖書の本当のところから少しづれてゐるようだと。大体、カルビンの言う方が一番真に近いでしょう。即ち、

「我々においては、聖餐式というときは、既に十字架を通り復活したところの、そして昇天されたキリストの靈的な生命にあずかる。もつと靈的にとらなくてはいけん。キリストがそう言われたのを、今我々が繰り返す意味においては、パンはパンで、葡萄酒は葡萄酒だけれども、それをいただきながら、そこにおいて單な



る象徴でもなければ、また、ただそこに共在していらっしゃるということでもなくて、もつと自分たちが靈的にキリストの生命にあずかるところの具体的なひとつのが顯れとして、葡萄酒とパンにあずかる。いたくものは、それは葡萄酒でありパンであるけれども、同時に我々の魂は靈的にキリストにあずかる」というわけだと。それはカルビンの説が一番真に近いものだと思われます。また、アウグステイヌスは、

「この聖餐というものはひとつ『見得る言葉』である。キリストの見得ざる言葉を、見得る言葉として受けとらなくてはいかん」

と言つて、「見得る言葉」としての意味を非常に強調した。アウグステイヌスのその言葉は名言でありましょうけれども。

そういうようなことで、聖餐式というものが今でもいろいろな意味あいにおいてとられている。しかし、要するに広い意味において、

「キリストの現在にあずかる」

という、大きな意味においては共通なものを持つてゐるわけです。

●キリストの靈的生命

イエス・キリストは、この最後の晚餐でいよいよ弟子たちと別れられる。今まで一緒にご飯を食べたり、水を飲んだり、葡萄酒を飲んだりされたでしょう。けれども、キリストの言葉を——今まで語つてきたところの言葉もそれから業も、言も行も——弟子たちも、またこれに接した群衆も本当に受けとることができない。それをよく分かつておられる。これはヨハネ伝の終りの方を、14章あたりからお読みになると分かりのとおりです。

キリストは、自分の言葉や自分の行為というものを本当に身につかせるために——その言葉や行為の根源はキリストの靈的生命ですから——この靈的生命を与えたいたいわけです。与えたいたわけなんだが、その気持を最後の一線でもつて表された。そして、ここに「契約」のと言われた。旧約聖書で、契約の保証として、モーセに十誡が、十言が与えられた。即ち、モーセに律法が与えられた。

「これを守る者は永遠にわが民であり、我は汝の神である」

と。十誡というものは、「十言」というものは、この契約の大重要な保証として与えられた。しかし、また、創世記の中に、ノアの洪水のところですが、

「永遠の契約」

ということがあそこに書いてある。創世記9章、11章あたりを開いてご覧なさい。

「血は生命のあるところ」

ということがあそこに書いてある。創世記9章、11章あたりを開いてご覧なさい。かん。そこで、生命の所在として、血というものをユダヤ人は深く把握してゐるわけです。



正直、三分の一の血が流れると、生命がまいつてしまう。肉は切られても、片腕がなくなつても大丈夫ですけれども、どういうところでも血が流れてしまつたらお終いです。あと全部完全であつても、まいつてしまふ。それくらい、血というものは生命に大事なものです。生命を非常に尊ぶ。

「罪の価は死である」

という。だから、生命に、生に代えるためには、この罪を亡ぼす必要がある。贖う必要がある。そこで、贖罪の宗教が出てきたわけです。贖罪の意味において、

「疵なきものを屠り血を流すことにおいて、罪が贖われる」

という。即ち、生命がそこに与えられ、獻げられるところにおいて、罪が贖われるという、そういう贖罪の宗教です。そこで、キリストの血というものは靈的な聖なる血ですから、聖血ですから、この聖なる血が即ち、永遠の生命を持つてゐる。

「この永遠の生命を何とかしてお前たちにやりたい」

と。どうしても、それは身の中に飲んで受けなければならぬ。即ち、体で受けとるわけです。体受するわけです。そこで

「我を食らえ、我を飲め」

ということは、ヨハネ伝の3章にも6章にも出でてゐる。それを、どうしても、キリストは与えたいわけです。ヨハネ伝6章52節に、

「⁵²ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』⁵³イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。⁵⁴わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦えらすべし。』（ヨハネ6・52～54）

即ち、

「血を飲み、肉を食らわなければ、永遠の生命はない」

と。キリストの血は、聖なる永遠の生命を持つた靈的な血であり、靈的な肉である。イエスはこういう具体的な表現をなさるわけですけれども、事実、地上のイエスの肉を食つたつて血を飲んだつて、それはダメですよ。

しかし、イエスは「肉」とか「血」とかいう表現をもつて、現実の肉よりも現実の血よりもはるかに素晴らしい本当の血、本当の肉——靈肉、靈血——このことを言つておられる。だから、

「肉は益なし」

と言われたその「肉」というのは、そういつた地上的なものは益なし。大事なのは靈であるということ。もつと根源の現実である。相対的現実の奥の、本当の根源の現実の事態、根源の実体であるということを伝えるために、そう言われた。我々、五感を持つてゐるも



のに伝えるためには、そういうたった地上的な要素をもつて言うよりか仕方がない。本当の深い真理といふものは、概念的な表現よりも、そういうたった具体的な表現で実は表される。

「**「我是葡萄の樹き、汝きらは枝えなり」**

と言つたつて、キリストはなにも葡萄の樹ではない。けれども、

「**「我是葡萄の樹の如ごし」**

なんて言わないで、

「**「我是葡萄の樹である。汝きらは枝えである」**

と、非常に断定したものの言い方をなさる。しかし、そういうたった言葉に躊躇かないようにしてください。「葡萄の樹」と言い、「枝」と言つてゐる事態は、そういうたった具体的な相対的現実をもつて、本当の現実のどういう世界が言われてゐるかということを読まなくてはならない。それでみんな躊躇いてゐる。だから、この会話を見ると、とんちんかんな質問をしたり答をしたりしてゐる。

〔⁵⁵ それわが肉は真の食物、わが血は真の飲物なり。〕⁵⁶ わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。⁵⁷ 活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。⁵⁸ 天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらず、此のパンを食うものは永遠に活きん〕（ヨハネ6・55～58）

とある。

「**「此のパンを、我くらを食うものは永遠に生きる」**

と。キリストの信仰の現実は、かくも非常に靈的な現実的なものである。それが非常に観念的にずれてしまつた。あるいは象徴であるとか、あるいは精神的にとか、比喩であるとか、なんてなわけです。そういうたった象徴的な、比喩的な言葉を使ひながら、言つてゐるものは象徴でもなければ、比喩でもない。凄い現実であるということを掴つかまえなければいかん。聖書は、創世記から默示録までみなそうです。神話だつて、神話において言われてゐる内容が掴めないで、

「**「これは神話であるから、こんな神話的な要素は省いてしまえ」**

なんてやるから、その神話の暗号をもつて言われてゐるところの大重要な信仰的現実が掴めなくなつてしまふ。アダム・イブの物語からしてすべてそうです。

● 懐の中に

キリストは、自分が父なる神と一つになつてゐる。内接円的な関係において、「の中に」 「の懷の中に」あるということ。この「懷」という言葉がヨハネ伝の始めの方にあるでしょ。ヨハネ伝1章18節に、

〔¹⁸ 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡ふところにいます独子ひとりごの神のみ之を顕あらわし給え



り。」(ヨハネ1・18)

「父の懷にいますところの、独子であるところのキリストという神さまだけが之を顕した」

という。「独子の神」の「神」の字があるとかないとか、これがまた問題になるけれども、それはいい。日本人にはこの

「懷の中にある」

という言葉が非常にしつくりくる。キリストの懷の中に我々がある。それが実は、信仰的現実である。福音書を読んで、なぜ、イエスという人はこんなにはつきりとものが言えるのだろうか。なぜ、こんなに素晴らしい力ある行動ができるのだろうか。これはみな、父の懷の中に彼があるからです。懷の中です。ただ外から、

「神さまは素晴らしい」

と言つて、「信じている」なんていうのではない。

「確かにひとりの神さましかない」

というようなことをただ信じてみたつて、それは本当の世界にはまだないわけです。その中に入つていること。中に入るためには、同質になることです。

「中に入る」

と言つても、ただ中に入つたつて、浸透していなければダメです。浸透作用です。この浸透作用は即ち、

「食らう、飲む」

という世界です。我々の魂が、今生きてあり給うところの靈的なキリストの生命にあずかる。「食らう、飲む」というその事態は、この浸透作用は、いかにして可能であるか。これは祈りの世界で可能である。祈りの世界でのみ、これが可能である。

考えられている世界では、それは明確な把握はする。結構ですよ、大いに考えたつていい。思索したつていい。また、よく聖書を読んで、それを覚えたつていい。どれもこれも結構です。けれども、ただ考えられている世界は、ただ対象的にそれが掴まえられているだけです。

● 内側から共感

この花は何という植物だか知らんけれども、

「この植物はどういう葉で、どういう姿をしているか」

なんてなわけで、一生懸命で観察する。考察、観察、研究する。結構です。それは科学的な世界です。けれども、考察、観察、研究だけでは、この植物の生命の世界には入れない。植物の生命の世界に入るためには——植物が生命されているところのものは何であるか。水と太陽です。水と光です。

我々の肉体も植物と同質なんですよ。やはり、太陽の光と水がなければ、人間の体はどう



にもならない——太陽の光と水を自分で感じて、そして、植物と同質なものを感ずる。いや、実にもう少し言えども、天体とも我々の体は同質なものを持つてゐるという話です。星を見て、同質なものを感ずる。そういう同質性です。同質性をもつて生命づけているものを共感する。内側から共感するわけです。そうしたならば、その植物の心を心とすることができる。

自然界と人間界といふもの——

「自然を征服する」

なんていう言葉は私は嫌いです——自然と大いに共同していく。ただ自然を利用するのでもない。どうも、主我的な角度の考え方はみなあまり感心できません。自然界と共同していく。昔の坊さんたちは、そういった非常に自然の中に溶け込んだような在り方です。

日本人は大体、そつちの角度が割合に自然にいく。本来、日本の家というものは木造です。木の香というものはいいもんだね。自然と親しむことが日本人の感覚にしつくりするわけです。ところが、ヨーロッパあたりに行くと、非常に寒いでしょ。木では耐えられない。だから、石やコンクリートやレンガでがつちりと寒さを防いで、中でガンガン、ストーブを焚いてグルグル熱湯や蒸気を回して暖める。これは自然との戦いなんだな。ところが、日本では、戦いなんていうことはあまり要らない。自然が非常に恵まれてゐるから。融合の世界です。

そういうふた生命的自然との融合のことは、日本人は本来、生活の中に、存在の中に持つてゐる。だから本当は、この福音の世界の信仰を受けとるためには、日本人は既によい素質を持つてゐるんです。それを忘れてはいかん。

● 灵界との融合

自然界との融合ではなくて今度は、靈界との融合の世界です。キリストとの融合の世界です。野菜や何かを食べる。青汁や、近頃は熊笹の葉まで食べたりする。今度は、靈界のキリストとの交わり、靈的な交わり、靈的な結合です。この「結合」という字が「宗教」(レギオ)という字なんだ。そのためには、キリストはちゃんと言つてくださつてゐる。

「私を食らいなさい。私を飲みなさい」

靈の生命の私を食べなさい、飲みなさいと。最後の晚餐では、なるほど、地上のキリスト

だけれども、地上のイエスの中に既にこの靈的な生命が宿つてゐますから、それが必ず靈

体として復活する。変貌の山でキリストは既に肉体でありながら、驚くべき靈界的状態に入つて、輝いてしまつた。ああいう素晴らしい実存なんですから。それが自分の中に——

「恩恵と真理で満ち満ちてゐる」

というのは、キリスト自身が本当の恵みであり、キリスト自身が本当に活ける真理である

——満ち満ちて溢れてゐる。ただ満ちたつてダメですよ、溢れていなければ。与えてやまないところのものが、本当の満ち方です。



キリストはこれを与えるために——みんなが私の腕に噛みつくわけにいかない。また、私を切つて、その血を吸血するわけにいかない——ちょうど、葡萄酒とパンがあつたから、

「さあ、私の血だよ」

なんてなわけです。それはひとつ象徴的な言い方です。象徴でありますから、その象徴の奥に、それが本当の靈的な現実を表しているところのものである。そこで、何もそういうことを繰り返してやらなくたって、そんなことはキリストは問題としているのではない。今、最後の晚餐において、このことを具体的に言いたくてしようがないわけです。おつしやりたくてしようがないから、キリストはかく言われた。

「やがて神の国は来て、新しき新天新地になつて、新しき葡萄酒を飲む日までは、

もはやこの地上においては飲まない」

と言われた。

²⁵誠に汝らに告ぐ、神の国にて新しきものを飲む日までは、われ葡萄の果よ

り成るものを飲まじ』

と。最後の、そういつた新天新地における、羔の婚姻、大饗宴。これはイザヤ書26章あたりにも預言してある。もう旧約の預言者たちあたりから、最後の天地が晦冥してひつくり返つたあと輝かしい世界が時々伝えられていくわけでしょ。イザヤ書11章にも、

「乳飲み子が蝮^{マムシ}の穴に手を入れても、蝮が噛みつかない」

というような

「本当の平和の世界が来るぞ」

と言われている。そういう最後の大饗宴の、

「羔の婚姻の時が来るまで、自分はこの晚餐を最後として、もう地上ではお前たちと飲食をしない」

と。もう翌日には十字架にかかるわけですから、「その日」というのは翌日です。そういうような意味において、イエスは具体的に

「自分を食べないさい、飲みなさい」

と言われた。それが本当の信仰の現実である。

「この生命に、私の生命にあづからなかつたら、それはダメだ」と。

● 十字架と聖靈

旧約において律法をいくら守つても、それは本当の神との結びつきになれなかつた。本当の意味で守ることができない時代です。旧約でも、エレミヤ記31章には

「新しき契約

というのがあるけれども、まだそれは「律法を心の中に記す」



というだけの話だ。ところが今度は、イエスのこの新しい契約は、生命を本当に与える。生命を本当に与えるということは、旧約の世界ではできなかつた。それは、どうしても、ひとつ妨げがある。人間、「自我」というこの罪というやつが、これは世界の終りまで、地の極^{はて}までも世の終りまでも、人類の世界はこの罪からは現実には解放できない。これはもう絶対に。

けれども、それであるからこそ、この人間界ではその罪の贖いが絶対に必要なんだ。罪の贖いということをなしにしたらもう、福音の世界は、キリスト教の世界はない。これが他の諸々の宗教とはつきり違うところです。それは、ある程度のものは、それぞれの解脱の世界にあるでしようけれども。このキリストの贖罪ということは、キリストの十字架というものは、これは唯一獨一なものである。それで、その罪の贖いをしたあとで初めて、

「私を食らう」

ということができる。贖罪を受けたら、本当に「食らう、飲む」ということができる。

「今は、どんなに一緒にいたつてダメなんだ。今度は、お前たちの中に浸透していくぞ」

と。聖靈をもつて浸透する。

「聖靈におけるわが生命を受ける。その時に、私が今言った『飲み、食らう』といふことがどういうことかが分かるぞ」

と。聖靈のバプテスマとこの聖餐とは同じことですよ。洗礼と聖餐は同じこと。悔改めのバプテスマはヨハネもやつたろうけれども、生命のバプテスマは、キリストが十字架のあとで行う。これはローマ書 6 章に、

「¹されば何をか言わん、恩恵^{めぐみ}の増きんがために罪のうちに止まるべきか、²決して然らず、

罪があつたつて、それはキリストの恵みがあるんだから差し支えないと言つて、のほほんとしていれば、それは全然はきちがえだと。

罪に就きて死にたる我らは争^{いか}で尚^{なお}その中に生きんや。

その中にあつて、罪が主体となつてゐるところに、どうして生命があるかと。

³なんじら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは、

「キリスト・イエスに合う」というのは靈的な合一です。

その死に合うバプテスマを受けしを。

「その死の中へまでのバプテスマ」というギリシャ語の表現です。

⁴我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。

十字架の死ですよ。

これキリスト父の栄光によりて死人の中より甦えらせられ給いしごとく、我



らも新しき生命に歩まんためなり。

「生命に新しく歩まんためなり」でもいい。

⁵我らキリストに接がれて、その死の状にひとしくば、

キリストと共に十字架されてですよ、「その死の状にひとしくば」と同じことです。

その復活にも等しかるべし。⁶我らは知る、われらの旧き人、キリストと共に十字架につけられたるは、罪の体ほろびて、此ののち罪に事えざらん為なるを。⁷そは死にし者は罪より脱^のるなり。

もう死んでしまったから、罪から解放された。靈的な死ですよ、もちろん。

⁸我等もしキリストと共に死にしならば、また彼とともに活きんことを信す。」

(ロマ 6・1~8)

キリストの甦りに与かる。では、「与かる」というのは、ただ思い込みではしようがないんで、与かるためには、生命を飲み、食らう。復活のキリストの生命を飲み、食らうとは何か。これは、聖靈のバプテスマを受けることです。御靈を注ぎ込まれなければ、「飲み、食らう」ことにならない。

●洗礼と聖餐は一にして一つ

だから、十字架されて復活するという、いつも申し上げている事態です。

「われキリストと共に十字架せられたり。もはやわれ生くるあらず。キリストわがうちに在りて生き給うなり」

というのが正に、十字架と復活と聖靈がぴたり一つの言葉で言われているわけです。神の義が立ち、神の愛が貫くところが即ち、十字架です。

新しい方もいらっしゃるから、「義」という字をちょっと説明しておきます。「義」の字は、「羊の我」と書きます。羊の我、即ち、小羊のごとく神の意志に従うのが「羊の我」です。神の意志に服従する。この「従う」というのは、あの軍隊的服従とは違う。これは信頼して従うのであって、喜んで従う。

「絶対命令だから、絶対に従う」

という、いわゆる軍隊的なのは違う。それは例えて言えば、旧約的な世界だ。けれども、新約における本当の信頼は——旧約だつてももちろん、詩篇23篇は信頼の内容ですよ。けれども、そういう意味で今言っているのではない——即ち、神に信頼して喜んで従うのがこの義の姿です。ルターは

「楽しみと愛をもつてこれに従う」と言つた。それが本当の従い方だと。これは、ルターは自分ができなかつた。キリストの神さまへの従いというものが本当に分かつたから、そのキリストを受けとることによつて義とされる。



「義とされる」

というのは、キリストの素晴らしい具体的な義の内容が入ってくることです。もともと、「義とされる」というのは法律上の言葉ですけれども、それがもつと福音的には、具体的にキリストを受けとることによつて義人とされている。「義とされる」ということが、お題目の、ただ法律上の「義認」というようなことでは——言葉は法律から発しているけれども——それを福音的内容にしていなければしようがない。その姿は同時に、神さまの愛の中にあります。その姿になると、

「我なんじを愛す」

という言葉が響いてくる。こつちが偉いのでも何でもない。こちらはただ平伏しだけです。何もない。そして、本当に神さまを受けとつている姿を神は喜ばれる。

聖靈が十字架において我々に与えられてくる。その内容を具体的にいよいよ展開していくものは聖靈のバプテスマです。だから、洗礼によつて——洗礼は悔改めのバプテスマとしてではなくて、聖靈のバプテスマとしてです——

「御靈のバプテスマを与える者である」

と最後の預言者の洗礼のヨハネが言つたでしょ。即ちその洗礼と聖餐は内的には結局、一つのことです。プロテスタントは「一つにしたけれども、我々は一つにしたつていいわけです。」「一つ」なんてやつてないで、それは「一」にして一つです。

「洗礼と聖餐は「一」にして一つである」

まだ、そんなことを言つた人があるかないかは知らんけれども。そうでしょ。洗礼と聖餐は「二」にして一つ。

「十字架・復活・聖靈は「三」にして一つ」

どこが間違つているか、というわけです。

三つであろうが、四つであろうが、みんな「一」に帰してしまう。それはボケるのではない。はつきりとそれは意識できます。けれども、それが本当に「つか」めるためには、帰「一」するところのものを掴んでいること。それは、この十字架によつてです。要は十字架であると同時に聖靈である。それをキリストは示したくてしようがなかつたんだけれども、せつかく、最後の晚餐をいたしましても、弟子たちはそれで決して本当に掴んではいません。みな散り散りになつて、失望落胆してしまつた。仕方がない。甦りのキリストが現れてやつと目が覚めた。今度は、イエスは、

「お前たちは集まつて、しつかり祈つて待つていろ」

と約束された。あの十日間の祈りのあとペントコステに至つて初めて聖靈がくだりましたから、そこで初めて、

「わが眼より鱗の「うろこ」ときもの落ちたり」

ということになる。「この世界だ」と。これは本当にキリストの靈の血を血とし、靈の肉を



肉とした事態である。

「わが今、生くるは、もう自分ではない。自分の中に流れているところのキリストの靈的な血であり、靈的な肉である。この熾くなる生命をどうしよう」とパウロが言つた通りです。

その生命は、ただ永遠の生命と言つて時間的に言つてはいるような生命ではない。もちろん「永遠の生命」ですけれども、それは質的にもう滅びないところの生命です。なぜ滅びないかというと、その内容が本当に素晴らしいからです。それは神の愛の権化であるところのキリストです。一言で言うならば、愛そのもの。それが我々の中に貫いている。生命的の質は何かといえば、愛である。

「汝らは世の光なり」

とは愛の光です。

「汝らは地の塩なり」

とは、「塩」というところに「義」というような言葉が考えられるでしょう。

これが即ち、イエスが与えようとしてやまなかつたところの——キリストの悲願であり、靈願であり、本願であつたところのもの——この最後の晚餐のパンを裂き葡萄酒を同じ杯から飲んだ奥に秘められているところの、キリストの悲願、靈願、本願である。

●神品

聖靈の貫きが来るから、キリストは安んじておられた。もし、聖靈の貫きがこなければ、どんなにキリストが彼らに説得しようとも、どうにもならん。祈りは大切ですが、我々の祈りを上から貫くものがある。私が「突破」と言うときには、人間が突破するのではない。キリストが、キリストの靈が——

「弥陀の本願の劫力」

という言葉があるけれども——キリストの御靈の本願の劫力が我々の信仰の根拠でなければ、その信仰は本ものでない。それを受けとるものが祈りです。

ただ祈りを激しくしたらいのではない。私たちの側がどんなに静かに祈ろうが、どういう祈り方をしようが、このキリストの本願の劫力を受けとる、これをキヤツチするということが、祈りにおいて極めて大事なことです。そうしたらば、どんな優しい方でも、不動のものがそこに来る。

人間というものは、いろいろな性格を持つていますから、いろいろな在り方があつていい。この集会の方々は、みなそれぞれの本来の持ち前の味でいてください。決して、人真似はいらん。ちょうどパウロが、

「聖靈は一つだが、賜物はさまざまである。体は一つだが、しかし、その各

部分の役割はみいろいろなものである」



と、コリント前書で言つてゐる通りです。人間は決して類型的につくられていない。個体というもの、人格体といふものは世界にその人と比べることのできるものは一つもない。みな特殊的な存在です。すべてが絶対の個なんです。相対的な存在でありますながら、絶対の個につくられている。皆さん一人ひとりは神の神品である。私はこの真理については、何よりも譲らん。お父さんにしろお母さんにしろ、一人の息子、娘を亡くしたとき、誰か他の人と代えられますか。

「あの子は逝つちやつたけれども、まだ何人もいるからいいや」

なんていう親がいますか。もはや、その穴は塞ぐことのできないものでしょ。これは即ち、

「その生命を失えば、全世界を得るとも何の益あらん」

と言われた、この一人の人の生命において、存在において、比重を絶したところのものをキリストは考えられた。1匹の迷える小羊のために、99匹をそつちのけにして尋ねていくイエスの神であり、キリストです。どんな一つのものも滅びることを欲し給わないところの神さまです。一人ひとりが本当にそのように神さまに造られている。なぜ、造られた自分を他のものと比較するか。

「私はどうも才能がありません。あの人は非常に才能豊かで、どうして、神さまはこんな不公平なことを」

なんて。そんなことはない。神さまは一人ひとりをそれぞれ神品としてつくられた。神の品なんだ。皆さんはそういう神品です。天下一品です。どうか、そのそれぞれの特質といふものに、その特殊性というものが素晴らしい輝きを発し神の栄光体となるためには、ただ一つキリストの生命が、キリストに現れた神の靈が皆さん一人ひとりの中に入つてくること。ただこの一事だけです。世の中の、人間の問題中の問題はこの一事だけです。

●キリストの本願

「私は道である。私を通らなければ、神に行けない。私は道そのものである。

私は真理そのものである。私は生命そのものである。私は愛そのものである。

私は義そのものである」

というこのキリストです。しかも、これを受けたときに、キリストは、谷底にどうにもならなくて動けなくなつてゐるものに、上から下りてきて担つていく。ルカ伝15章は素晴らしいところです。あの迷える小羊にしろ、放蕩息子にしろ。

小さい子どもが遊んでいるとき、母親はちゃんとそれを念としている。どこにいるどうか、何しているだろうかと。神の顧みかえりというものは力ある顧みである。私たちはその神さまの顧みに向かつて仰ぎ見るというのが、これが祈りです。この仰ぎ見をすれば——両手をあげてこれにすがりつくという姿が祈りです——神さまの方はもつと素晴らしい腕をもつて、眼をもつてこれを顧み、また抱きあげる。この神の本願、キリストの本願がいつ



いかなる時にもかかっている。

「こんなところでは、こんな私の状態では」

なんていうことはひとつもない。いついかなる時にもかかっています。私たちの祈りに本当の力が入るのは、このことに気がつくことです。このことに気がついたらば、神さまはみなそれぞれの在り方を、あるがままそこに投じだしたところに捕まえる。人間の熱心ではないですよ。

「神の熱心がこれを為す」

と書いてある。パウロも始めは自分の熱心であつたが、

「神の熱心が、キリストの熱心が自分を捕まえる」

と、どこかにそういった角度の言葉があつた。

地球は太陽の回りを一生懸命で自分が何かを伸ばしてグルグル回つてゐるでしょうか。太陽の側から出でてゐるところの凄い引力が引っ張り回してゐるのではないか。我々もまた、そのような靈的な力で引っ張り回されていることに気がついたら、こんなうれしいことはないじやないですか。

「我は地球なり。キリストはわが靈的太陽なり」

と。その力からは、逃れようとしても逃れられない。その光、その生命は何と素晴らしいだろうかと。キリストは、

「我は義の太陽なり。汝らは引っ張り回されているところの地球の山川草木 ことぶと悉く ことごとである」

と。こういう事態に、我々の祈り心を開けますと、もう

「主さま!」

という楽な一言で深くその世界に入る。不動の世界に入れる。どうですか、皆さん、本当にそうでしょ。そういうキリストの本願が、

「どうか、この生命を、この私の中に溢れている神さまの生命を、この肉をこの血を飲んでくれよ」

「はい。私はあなたの中に」

と。これが

「われキリストの中に。キリストわが中に」

と、パウロが言つてゐる事態である。

「われと父とは一つである。私は何もできない。何も言えない」と言うイエス・キリストが自由自在であつた。

「私の熱心が神さまを動かして、このようでござる」

なんて、どこにもキリストは言つておられない。キリストは「神さまが為せということを私はしているだけだ」



と言われた。山上の垂訓がそうです。

「靈の貧しき者は幸いなり。天国は——神という天国は——わがうちにあり」と。靈が貧しい。何もないという、無即無限の世界です。

●無は即ち無限無数

「無」という字の原型は、

「天蓋の下に廿と廿の林」

という字です。「大空の下の四十の林」というのは、無数の木があるということ。中国人は決して、無において虚無を考えていない。無は即ち無限無数であるという。果てし無きことである。

私なき無私の世界にキリストがあつた。この無私において、無限の神さまが来た。我々は、その神さまに信頼して依り頼んでいるところの、神さまに引っ張り回されたキリストを受けていく。エレミヤが、

「あなたが私を捕まえて、どうにもならん。私があなたを捕まえるのではなくて、あなたが私を捕まえたから、私は離れようとしたって、しようがないじやないですか。私はもう言うのをやめようと思つたつて、火が燃え付くようでどうにもならんじやないですか」

というのが、やはりエレミヤの自覚があつた。モーセも、

「いや、私はとてもそんなことはできません」

と言つた。彼は驚くべき英雄だけれども、信仰的英雄なんてのはダメですよ。

「私はとてもできません」

と言つて平伏したら、

「私がお前と一緒に行くから大丈夫だ」

「それでは、行きます」

と、みな、上からの呼びかけ、つかみかかりによつて動いたのが預言者たちだ。

どうか、皆さんはその角度から樂に受けとつてください。「樂に」というのは、のほほんでということではないですよ。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして」

というキリストの言葉は——投入ということは、それは我々の投入です。けれども、投入そのものが何ものかではない——そのように尽くし得るところの事態は、神さまの方から尽くしてくださつてゐるからです。破れかぶれの尽くしで大丈夫です。

どこまでも地動説であつて、天動説ではない。「コペルニクス的転向」を今のクリスチヤンが起こさなければ。コペルニクス的転向ということを自然科学の世界でばかり考えてゐるが、靈界においてこれを受けとらなければダメです。コペルニクス的転向をもつて動く。



神中心とか、キリスト中心とか、言葉では言いますよ。けれども、本当に中心を受けとつているかということになると、その現実の世界に自分をぶち込まなければダメです。

靈的に投入することは大事ですけれども、自分の靈的投入が何ものかと思つてはいかん。どうか、そういうことで、皆さんは決して、自分の側の何かを量ることはいりません。そのまま、あるがまま行くところが本当のまことの世界です。それが本当のまことです。そこに本当にイエス・キリストは入つてくださる。

最後の晩餐のところを読みましても、イエス・キリストの心境をお察しすれば、これは苦しいです。弟子たちが食えないもの。その

「食う、飲む」

ということは、聖靈のバプテスマを受けて初めてこれが本当の「食らい」であつて、これが本当の「飲み」であつたということです。

先程のパウロのサクラメントのことは、それを今度は、もはや儀式の聖餐式ではなくして、祈りの世界で聖餐的な祈りを——無教会では

「洗礼も聖餐もいらん」

と言つて今度は棄ててしまつた。要らんではないですよ。洗礼と聖餐は我々にとつて重大な事柄です——私たちがこの祈りの世界で本当の洗礼と聖餐にしていく。何も儀式ではなくて、いついかなるときも、自分で繰り返し前進していく。これが最もイエス・キリストの御意に適う福音の把握の事態ではないですか。

昨日、O君の集会の人にでつくわした。毎朝、有志を集めて、出勤前に祈りの会をしていそです。我々はそういうことを、私自身、皆さんにやつてませんで、誠に申し訳ないものでございますが。どうか、集まる集まらないはともかくとして、朝祈りを深めて、祈りにおいて一切のこと当たつていくということは、本当に実践していかないとダメです。これは論より証拠なんです。「しなさい」でも何でもない。また夕べにしろ、また昼間にしろ、いざこにおいても神さまとの交わりの、祈り心の人であること。祈りが同時に行動になる。

「ラボラーレ エスト オラーレ」(労働は祈りなり)

と言うけれども、働くことにおいてもまたそこに祈りがある。すべてが祈りである。神さまの、キリストの祈りを、聖靈の祈りを貫くところの、上から貫かれているところの、そういういた祈りの事態です。これがもう常に源泉です。

「キリストを食らう」

という。ご飯よりも大事な、三度三度のご飯よりも大事なのは、この祈りの世界でキリストを食らつて、これを原動力として生きること。祈りとは、キリストを食らうことなり、キリストを飲むことなりというわけです。

